

大地

6号
56. 2. 1
浄土真宗大谷派
浄国寺
(23) 5724

互尊独尊

山崎 武雄

互尊、独尊、この語を提唱されたのは、長岡の互尊翁とよばれた野本恭八郎氏である。若くして仏法に深く帰依されていたが、人身受け難し、いまずでに受く仏法聞き難し、いまずでに聞くこの身、今生に於て、度せずんば、さらに何れの生においてかこの身を度せん
の語より、わが生きる喜び、生きる意義を感じて、希有の人身、有難き人生、独尊、独尊といわれ、た。やがて人は地位、名譽、財産、強弱、いや善悪さへ問題じ。ない、独尊の集りだ、互いに尊び合うこととが、第一だとして、互尊、独尊の語を提唱し、これにより、仏法広まれ、世の中安穩なれ、の理想が実現すると、とかれた。昭和の始

め全資産を出して、仏教図書を中心にした「互尊文庫」を創設、故山本大将とも親交のあった、反町栄一氏を理事長にし、毎月、冊子「互尊」を発刊、全県下の学校に無料で提供された。内容は長岡を中心、全県下の宗教家、文学者名士の執筆、深い反響をよび愛読された。又この文庫へ講師を招いて講習、講演、更に県下各地へ招きに応じて、文庫より講師を送られた。堀口大学氏の父君、久萬一氏（当時ブラジル大使）の講演を私も聞いた覚えがあり、感銘深かった。長岡を中心に互尊の名を知らぬ人なく、遂に「酒名」にまでなった。

ある時冊子互尊誌上で、金子大栄師に「互尊に相応する語を、真宗でお教示下さい」と公開質問された。金子師はすぐ「当相敬愛」「まさにあい敬愛すべし」
本願を信じ、念仏申す身は、親子、夫婦、兄弟姉妹、人と人、皆、まさに相敬愛し互尊であると教示された。そして次の和讃を示され、補足解説された。
清風宝樹を吹くときは
五つつの音声出しつゝ
宮商和して自然なり

清浄勲を礼すべし
浄土の清らかな風が、宝樹にあたる、たくさんの美しい音声を出し、絶体調和しないといわれた宮（音名）と商（音名）の音さへ、り。ばに和音となり、何ともいえない妙音（自然の意）をかなでる浄土の清浄を礼拝しましよりの和讃の意でしようか。野本翁は歡喜し、厚礼された。私事で大變恐縮ですが、小生等昭和十三年春結婚した時、金子師はお祝として、「宮商和して自然なり」の語を額にして贈って下さった。亡父母を始め一同驚喜し、あらためてお礼申すと共にその解説教示をお願いした。先生は、宮も商も音名であり、元来調和しない音と言われて居ること、それが和するから不思議だと説かれた。人は何より「愛」と申すものゝ、親子、夫婦、人と人の間に立派に成立している様でいて崩れ易い。それは我執、我愛人としての、はからいとつつかれて居り、愛し、信じ合ったと申して乍ら所謂他が自己のペースに入ってきた時の事である。これは如来の誓願信じお念仏申す時、救はれまずとお手紙で淳々と教えて下さった。全く有難く、頭がさがり、

今も保存してある。あれから四十
 有余年、女二人、男二人の子を持
 ち、戦中、戦後の苦しい中をどう
 にか育て、育てられ、それぞれ四
 人とも世帯を持ち、子供にも恵ま
 れ、今は上は高校、下は幼稚園、
 男六人、女三人、九人の孫あり、
 「おじいちゃん、おばあちゃん」
 と寄って来てくれる。二人とも病
 后なので殆んど寺務等、若い者に
 ゆづった型になって居るがよくよ
 くやってくれて居る。全く有難く、
 勿体ない、お蔭様の生活である。
 互尊、独尊、当相敬愛、宮商自
 然和、身を以ていい言葉をお教え
 下さいました。
 有難うございます。

金婚式に

上十日市 長谷川

寛

「金婚式」それは人生にとって、
 家族にとって、この上ない喜びで
 あります。父は七十七才、母は七
 十四才、極めて健康で昨秋ささや
 かにお手次さまをはじめ親せきの
 皆様で永年の労をねぎらい心から
 盛会を宴を催すことができました。

私は、この年代の方々を見ると
 き、総じてその顔には人間味あふ
 れる深い人生の年輪を感じます。
 三代を生きぬいた感慨、そして律
 義で誠実な充実した人間性を感じ
 ます。これこそいまの時代に求め
 られている人間像ではないかと思
 います。

この年代の人達はおしなべて苦
 難な歴史の道のりを培い、今日を
 築き上げた礎であったと思えます。
 聞くところによると、私の生れた
 昭和四年頃は、米国に始まった世
 界的な大恐慌が波及し農村をはじ
 め産業、労働界にも深刻な影響を
 受け、米を担保とした借金、若い
 娘さん達の出稼ぎ、失業者の増大、
 水害、小作争議など、しのびない
 状態であったと聞きます。さらに
 追い打ちをかけるように、昭和九
 年の惨たんたる凶作、まさにこの
 時代は昭和のどん底であったよう
 に思われます。そして戦争、戦後
 の混乱、葉をたき、木の葉を喰べ
 身命を継ぎし飢餓の時代：
 これらの泥まみれの苦難を乗り
 越えて得た人生観はなんであつた
 だろうか。こんな中にあつて人々
 の心は一層連帯意識で強く結ばれ
 ていたと思えます。これこそ崇高

な人間哲学ではなかつたらうかと
 思います。

物質文明に人間性が失われかけ
 いまそれを呼び戻そうと：昔は
 人情も厚く良き時代であつたと耳
 にします。思いやりのある人間社
 会、お互いに助け合い共に生きる
 心のかよいあう地域社会がいまこ
 そ強く望まれているのではないで
 しょうか。

私は両親の金婚、父の喜寿の祝
 に昔を省みるとき、頭の下がる思
 いでいっぱいです。

父はいまでも壮年の如く仕事を
 日課としていますがそれも健康法
 と思ひ責任をもってもらつていま
 す。母はこの長い苦難の中から得
 た真実の人生の目覚めに信心の喜
 びで幸せな毎日を送つております。
 私も人生五十年にして両親の深
 い恩愛を一層骨身にしみて感謝を
 しております。ともあれ、人間ら
 しく生きたいと心に念じています。

(註) 新井市役所勤務

昨年十一月二十三日の勤労感謝
 の日に法要を務め、その後父健
 治さん(七十七才)と母ヤエさ
 ん(七十四才)の喜寿と金婚の
 お祝いを、内輪乍ら和やかに有
 意義につとめられた。健治さん
 は篤信家と知られた。ヤエさんは
 上山奉仕にも行かれた信心深い
 穏やかな人である。

雪の中て

山崎隆昌

越後高田の地、冬に雪の降るのは当り前ではあるが、よく降り続いたものである。雪景色を愉しむなどの洒落たものとは程遠い。雪の冬の辛さを改めて教えられたのである。毎日、雪に埋もれた薄暗い家の中に居ると、何か巨大な白い化け物の腹の中に呑みこまれた感じさえする。

去る一月二十二日 牧村平方の山本さんのお宅へ葬式に出かけて来た。雪のため交通が混乱し、定刻に一時間も遅れ、皆さんにずい分ご迷惑をおかけしてしまった。また、昨年の二月十七日、猛烈な吹雪の中、大島村棚岡の武田さんの家に法事でお邪魔した。この日は、昨冬一番の降りで、棚岡では一日で一メートルも降雪した。ほんの先を歩かれる武田さんの足跡が、たちまち降る雪の中に消えてしまふよう降りだった。

高田は豪雪地区とはいえず、まだ量の少ない方で、東頸の大島村や牧村の奥地、あるいは西頸桑

取谷の奥など、雪の量も四・五メートルを超え、雪崩の危険もあり雪との闘いは、はるかに凄しいものである。

しかし、人間のわずかな土地に住むこれらの人々の顔には、生活の苦悶の翳りはまったく見られない。真摯であり、柔和で、全てのものを腹の中に押さめ込んでしまふ強かさをみることが出来る。村は過疎化がすすみ、老人や、女の人が大半で、子供の姿などほとんど見られぬのだが、人々の土地（自然）への愛着、おおらかさには、ただただ頭の下がる思いである。

水すまし 流れに向ひ

さかのぼる 汝がいきほいよ

徴かなれども

齊藤茂吉の歌である。病床にある父から、私たち若い夫婦が貰った色紙に書かれていた歌である。歌心など々と解さぬ私であるが、この歌を詠んだ茂吉の眼、茂吉の心にほのほのとしたあたたかさを感じる。懸命に生きるもの、生命への茂吉の共感を見ることが出来る。

この歌をくれた父が、甲状腺を患い“声”を失なって既に六年にもなる。昭和四十九年十月二日の手術であった。少し甲高い父の声は、今は徴かに耳の底に残るのみである。

手術前父に“声”の録音を申し出たところ頑として拒否された。当初、録音しなかつたことを残念に思ったが、今この茂吉の歌を想う時、録音しなくて本当によかつたと考える。

録音機をはじめ、生活の近代化は、私達の生活を限りなく豊富にしてくれた。しかし私たちが、生活様式の近代化へ、何の抵抗もなく同化していくことが、逆に取り返しのつかない精神的貧困という病にむしばまれていくことに気がつかない。

「冬来たりなば春遠からじ」家の屋根までもとどくうず高い雪も、四月、桜の花がその美しい花を開くころにはすっかり消えてしまふことだろう。不思議なことである。

心のやすらぎ

田口 石田 まさ

今年は大変に雪も多く寒い毎日ですが、去年は主人が病を得て病院生活に入り、子供達の看護を受けつゝ八月末に他界しました。覚悟していたとはいえ、自分も凡夫故、本当に悲しく切ない思いの中にあって御住職様より次のような句を頂きました。

「一葉落ち又一葉落ち寺の秋」この句を幾度も幾度も口ずさみながら、人間もこの様に仏様のお招きさへあれば参らせて頂ける有難さを身にひしと感じ乍ら、日々の暮しの中に、私は御仏の慈悲を、しみじみと受けとめられる様になりました。本当に有難いことと、感謝致しております。

又、三十五日の日に若住職様と同席致し、主人の死に対し、妹が、死んだらどこへ行くのかとの質問を致しました処

「どこへ行く事なく、それぞれ心の心に居られます」との答に自分は安心に似たものを感じました。いつも、どこへ行ってしまおうの

かと思いつら、只々、御仏の尊い慈悲と、み教えの真実を知り、ひたすら仏前に手を合せ、心の安まる毎日を送らせて頂けることを感謝しております。

「おつとめの

声高らかにきこえかし

弥陀の浄土に

おわすまよ

(註) 亡くなられた信治さんと共に初代のおこされた「もちや」の家を継ぎ名物「あんもち」「笹寿し」などで、店を発展させた。夫婦共篤信の人だったが信治さんは昨夏逝去された。

「小さなお客さま」

山崎 慎子

恒例の年始には、毎年決った顔ぶれが、ほほ決った日に寺に参って下さいます。

お参りの方は、本堂で合掌礼拝の後、庫裡の方でささやかなお膳で新年のお酒を召し上ります。(ちなみに、お正月に使う黒い塗りのお膳は寺でも一年を通して、この年始の時にしか使わなくなっ

まいりました。)

今年のそうしたお客様の中で、とりわけとても嬉しかったのは二人の小さな男の子でした。富岡の山田さんのお孫さんで、おじいさんに連れられて四年生と一年生の兄弟が来てくれたのです。おじいさんは「同席の方の迷惑になるかとも思ったが、小さい時から覚えさせておきたかった」と言っておられました。近頃はこうして、お講やその他の寺の行事に小さい人を連れておいでになる方が、大変少なくなってしまう

小さい頃、おじいさんやおばあさんに手を引かれて寺に参り、お経を耳にし、法話に触れて、煮やや和え物を食べた、というささやかな思い出が、大きくなってから、意外に鮮明に記憶されているということが多いようです。又、そういう思い出を持つ人はよく寺を懐しんで下さいます。

今年も又、八月七日にはお盆、戦歿者追悼・永代経のお講が、十一月一日には報恩講が予定されています。どうぞ、小さい人の手をひいて是非お参りにお出かけ下さい。

大みそか

山崎 昌子

大みそかが近づいてきた。あと一週間で大みそかと思うと落ちつかなくなってしまう。昨年はごちそうを食べ、お母さんからラジオを借りて紅白歌合戦をふとんの中で聞いていたのをおぼえている。今年はどうな風になるかと考えた。今年もやはりラジオを聞くのかなあ、除夜の鐘を鳴らすのかなあといろいろ想像してみた。とうとうあと一日ということになった。お父さんが、「さあ、明日はどんなことして遊んでやるかな。」と言いなさった。お母さんが「さあ、どんなごちそう作ってやろうかな。」と言いなさった。夜、こうふんしてなかなか眠れなかった。いよいよ当日になった。自分の部屋をまづかたづけした。それから、ろうかとなの上と階段を自分でぬった雑布でふきそうじをした。外は、すみきった青空だった。台所に行ってみると女の子が画いてある可愛らしい紙ぶくろがあった。のぞいてみると、みかんがた

くさんと、クラツカーが三つ入っていた。私と弟はすっかりうかれってしまった。夕方、お母さんに手伝ってごちそうを作った。夕食の前にお参りをした。いつもは早く終らないかなと思うけど、この日はそう思わなかった。ごちそうを食べることになった。「マジックシンヨー」をテレビで見た。ごちそうはやっとこさっとこ食べられるほどすごかった。紅白歌合戦を今年もテレビで見た。いろいろな衣しやうがあった。そんな風に楽しんでいるとお母さんが紙包をくださった。あけてみると、おはじきとモンチツチ(サルの人形の名前)とプラスチックパズルだった。おはじきを開けたくなくなった。おじいちゃんから一日早いお年玉をもらった。三千円入っていた。計画を立てて使おうと思う。それからクラツカーをならした。「パーン」といきおいのいい大きな音をたてて、きれいな紙がフワッと広がった。おなかもふつうになったところ、年越しそばを食べた。口の中はスルリツと入りおいしかった。紅白歌合戦が終って少し遊んでいると弟が、「おねえちゃん、明けましておめでとう。」と言う

ので、隆史(弟の名前)何を言っているんだろうと思っで時計を見ると十二時をまわっている。なるほどと思い「おめでとう」と答えた。それからアノラックを着て、鐘つき堂に行った。知らない人がうす暗い道を歩いて行った。それから弟と順番に十八回、鐘をならした。冬の夜で気温が低いので、家にすぐ入った。おそくまで起きていたのでねむくて、夢も見ずに寝た。今年、特に良い大みそかだった。(註)長女、小学五年。稚拙な文だが、ある時期の寺院子女の生活の一面としてのせてみた。

〔後記〕これぞ高田!を思い知らされるような豪雪の一月でした。ほどよい雪はロマンチックでもあり、生活の内容をいろんな意味で豊かにしてくるのでしょうが何事も過ぎたるは：です。その代り、と言っては何ですが雪国の人ほど春の喜びを深く、強く感じる事ができるようです。

「大地」六号をお届けします。今回は長谷川さん、石田さんのお二人に共に心暖まる原稿をお寄せ頂きました。有難うございました。又、発行の度に十日市の長谷川定雄さんその他の方から激励を頂き、合せて深く御礼申し上げます。